

高校生という多感な時期の留学は、自分を大きく成長させてくれた

Y.S.

早稲田大学 国際教養学部 国際教養学科 進学

ひたちなか市立 田彦中学校 卒業

前提として私の受験は特殊で、英語と小論文がメインの科目でした。そのような入試形態であっても、添削やわからない部分の解説など、先生方は非常に丁寧に、そして親身に対応してくださいました。まず英語に関しては、他校に比べると進度が早く高校1年のうちに受験に必要な文法は大方学びます。その後、2、3年に渡って問題演習などを通じて単語力や英文の構造理解などを深めていきます。2、3年次に出される課題は相当な難易度ですが、授業での詳細で分かりやすい解説によってよく理解し、自らの英語力を高めることができました。また1年次には英会話をする授業があるのですが、それによって授業で学んだ英語をアウトプットすることができます。私は国際教養コースに所属していたのですが、留学中の現地での生活の礎となったのは間違いなくこれらの熱心で徹底した英語の授業です。次に小論文ですが、内容のみならず文章の構成、語彙なども直してくださいました。そして、ただ直して生徒に返すだけでなく、何故それがいけないのかを説明してくださったり、先生と一緒に過去問の小論文のテーマや自分の書いた文章を吟味して共に最適解を考えたり、時にはお互いの意見を戦わせたりと、ただの添削に留まらないすばらしい指導をしてくださいました。この指導で培われた能力はこれからの人生でも必ず活かされると確信しています。最後に、私は国際教養コースに1期生として所属していました。哲学の授業などを組み込んだ独自のカリキュラム、PR や説明会などの発言の場に自らの足で立ち自らの言葉で話すという経験や、高校生という多感な時期の留学は、私という人間を大きく成長させてくれました。国際教養コースに興味のある方は、留学の意義の大きさを理解していると思います。しかし、国際教養コースは留学が全てというわけではありません。例えば、私にとっては哲学の授業の存在が、自らの成長にとっても大きな役割を担っていました。哲学には、物事を批判的、多角的に見て考えることで本質に近づこうとする思考法があります。この思考法は哲学のみならず会社の会議から日常的な対話まで、社会生活の様々な場面で活かされます。これを授業で知り、実践できたことは私にとって大きな学びとなりました。国際教養コースへの入学を検討、希望している方には「英語」「留学」という言葉のみにとらわれず、更に広い視野で物事を捉え、考え、そこから学びを得てほしいと思います。

高校時代の特に印象的な思い出は、留学と高校3年次の文化祭です。国際教養コース1期生として、コロナ禍に苦しみながらも行くことのできたカナダと、そこで体験した日本とは全く異なる生活、そして出会ったかけがえのない友人たちは一生の宝物です。また、実は留学がきっかけで文化祭のステージに立つことにもなりました。留学中に会った友人が音楽をしており、それに憧れたのがきっかけとなって自分も楽器を始めました。帰国直前に、文化祭でバンドを行おうとしている友人からメンバーが足りないという連絡を貰い、ビギナーながらも2つ返事でバンドに加入することを承諾しました。帰国後、4ヶ月という限られた時間の中で受験勉強と並行して必死に練習を積み重ね、本番で大きな歓声をもらった時には、「音楽を始めて良かったな」と心の底から思いました。

私は洋楽や英語の授業が好きで、高校生のうちに留学をしてみたいと考えていました。その折、茨高の説明会で私が入学する年に国際教養コースが設立されると聞いて入学を決意しました。国際教養コースでは高校1年の時から一貫生と高入生が同じクラスなので、一貫生と高入生という区分はあまり機能せず、みんなすぐに仲良くしていました。また、私は高入生ですが、クラスの友人を通して多くの一貫生と仲良くなりました。一貫生と高入生に差はなく、部活や趣味など、きっかけさえあれば関係は生まれると思います。自由な校風が謳われているように、校則はあまり厳しくないと思います。ただし、「報恩感謝」という校訓の通り、感謝と礼儀に関しては厳しくあるように感じました。このメ

リハリが生徒の成長の一助となるのは確かです。

新しい土地での一人暮らしという新たな生活から学ぶことはたくさんあるように思われます。私は、大学での学びだけでなく、自らの人生を学びの場として新たな知識や経験を得ていきたいです。そして常に自らをアップデートし、何事にも臆することなく挑戦するような人間になりたいと思います。